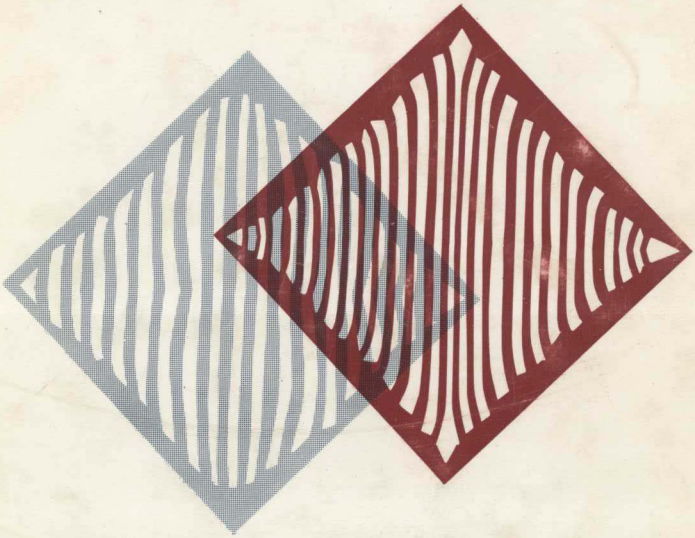
山本二三丸著

世界経済論

—『資本論』の世界—



青木書店

世界経済論

—『資本論』の世界—

山本二三丸著

青木書店

山本二三丸（やまもとふみまる）

1913年　愛知県豊橋市に生まれる
1936年　東京大学経済学部卒業
現　在　愛知大学教授，立教大学名誉教授，経済学博士
主　著　『再生産論研究』（1956年，日本評論社）
『労働賃銀』（1960年，青木書店）
『現代資本主義の経済法則』（1962年，青木書店）
『増補・恐慌論研究』（1965年，青木書店）
『構造改革論批判』（1966年，青木書店）
『経済学概論』（1972年，青木書店）
『資本論解説 I』（1979年，青木書店）

世界経済論　『資本論』の世界

1980年12月 1 日第1版第1刷印刷
1980年12月10日第1版第1刷発行
定価 2000円

著　者　山本二三丸
発行者　山根　襄

発行所　株式会社 青木書店
東京都千代田区神田神保町1-60
振替口座・東京 8-36582 番
電話・東京（292）0481（代表）
郵便番号 101

© Fumimaru Yamamoto, 1980
精興社・黒岩大光堂

0015

ISBN4－250－80050－4

まえがき

この小著は、もともと大学で講義するさいのテキストとして書かれたものである。表題の「世界経済論」は、講義課目の名称と同じものであるが、しかし講義課目の場合の「論」は「講義（lecture または study）」の意味であるが、この小著の「論」は「理論（theory）」の意味である。この小著で明らかにしようとしたのは、世界経済そのものの成立、発展および変化の法則であって、世界経済の日々生起する個個の現象または時局的な問題ではない。肝要なのは、いま世界が全体としてどの方向に、どのように動いているか、その主要な推進力はどこにあるか、ということを見定めることである。

小著の副題を「『資本論』の世界」としたのは、マルクスの主著『資本論』によってはじめて科学的に解明された「資本主義社会の社会主義社会への変化＝発展の法則」が、今日まで世界史の展開を基本的に規定しつづけており、現在の世界経済の動向そのものこそまさしく右の発展法則を世界的規模で輝かしく実証しているものにほかならないと考えたからである。

「先進的」資本主義諸国ではいま「満ちたりた」平和ムードと改良主義が支配的であるようにみえるが、「おくれた」国々では、数億の勤労人民大衆のまさに人間らしく生きるための苦難にみちたたたかいが昼となく夜となくつづけられている。もし地球人口の半数以上がいまもなお飢餓に瀕しているとするならば、そしてまた、「おくれた」国々で毎年二五〇〇万にのぼるいたいけな児童が窮迫から死亡しているとする

ならば、このことは、世界経済のかくれた内部的な仕組みについて明確な照明をあてることを、われわれに要請しているものといえないであろうか。今日ほど、人間の生き方を、全世界的関連において、歴史的発展の道すじの的確な見通しのもとに、ただしく解明することが緊急の課題として提起されているときはない、とわたくしは考える。このつたない小著がそのような歴史的課題の重大さを浮かびあがらせることができ、また課題にとりくむための素材なり手がかりなりをすこしでも示すことができるとすれば、著者としてこのうえない幸せである。

本書公刊にさいしては、青木書店の山根襄社長と江口十四一編集長に種々配慮をいただいたので、ここに記して感謝の意を表わしておきたい。

一九八〇年八月二三日

著　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山本二三丸著

経済学概論	B6判	定価一八〇〇円
世界経済論	46判	定価二〇〇〇円
資本論解説 I	46判	定価一八〇〇円
労働賃銀	B6判	定価二〇〇〇円
構造改革論批判	B6判	定価二〇〇〇円
増補 恐慌論研究	A5判	定価二八〇〇円

青木書店

目　次

まえがき……iii
第一章　世界経済の成立……3
第二章　産業資本主義の段階……14
第一節　国内の経済的構造……14
第二節　対外的関係……20
第三節　総　括……33
第三章　帝国主義の段階……39
第一節　資本主義世界経済の完成……39
第二節　『資本主義の最高の段階としての帝国主義』の課題と構成……41
第三節　『資本主義の最高の段階としての帝国主義』の内容の解説……62

第四節　総括――世界革命の展望……188
第四章　世界資本主義の崩壊過程……196
第一節　第一次帝国主義戦争による展開……196
第二節　国家独占資本主義への発展……203
第三節　第二次世界戦争によるいっそうの展開……208
第五章　社会主義社会への移行過程……215
第一節　社会主義社会の本質的特徴……215
第二節　過渡期の根本問題……219
第六章　現段階――展望……223
あとがき……235

世界経済論

『資本論』の世界

第一章　世界経済の成立

まずはじめに、世界経済がどのようにして生みだされてきたかを考えるにあたって、つぎのことを確認しておくことが大切である。

第一。人間社会の歴史的発展は、すべて原始共産社会からはじまって、奴隷制社会、封建制社会、資本主義社会という順序でおこなわれてきたものであるが、しかし、このことは、地球上のすべての民族社会または民族国家がかならずこのとおりの順序をもって一様に発展をとげてきたものだということを意味するものではない。世界史の現段階においても、まだ原始共産社会または奴隷制社会の段階にとどまるかまたはそれらの社会の要素を多分に残している民族社会も存在するし、また、資本主義社会でありながらそれ以前の古い諸関係を濃厚にもっている国家もある。そのうえ、発展過程のなかばですでに滅亡の運命におちいったものや、あるいは停滞をよぎなくされたものもある。しかし、全体としての世界史の発展段階を規定するものは、それらのなかでもっとも進んだ、高い発展段階に到達しているものであって、とくに中世以降にあってそれを基本的に規定したものは、西ヨーロッパの「先進」諸国である。

第二。世界の諸国民をたがいに結びつけ、それらのあいだにひとつの全体的な関係をつくりだすためには、なによりもまず、そのために必要な交通手段が発達していなければならない。こうした交通手段をつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くりだし、じっさいにこれをつかって、世界各地とのあいだの結びつきを生みだしたのは、西ヨーロッパの「先進」諸国である。それは、十五世紀末から十六世紀にかけてのアフリカ回航、新大陸の発見、世界周航によって、その幕をあけたものである。

第三。西ヨーロッパの「先進」諸国を駆って世界への進出をおこなわせたのは、それらの諸国において、これまでの封建制社会の体制が商品生産と貨幣流通のいちじるしい発展によってつきくずされはじめ、貨幣の権力が生産の封建的制限をうちやぶり、商人資本がより大きな貨幣財産の獲得を目ざしてその活躍の場をひろく海外に求めるようになったという事情によるものである。

第四。右のような海外進出が、主として商人資本によって、致富のため、より大きな貨幣財産の獲得を直接の動機としておこなわれたとすれば、これらの「先進」諸国がその海外進出によってそれとの関係をうちたてることのできた当のそれぞれのおくれた地域住民にたいして、どのような働きかけをしたか、そこにつくりだされた経済関係がどのようなものでなければならなかったかは、おのずから明らかである。

(1) 第一につくりだされた関係、すなわち「先進」諸国による働きかけは、おくれた地域に蓄えられていた金銀財宝の力ずくによる直接の略奪である。

(2) 強力による直接の略奪とならんで、つぎにおこなわれたのは、原住民の無慈悲きわまる虐殺と掃滅である。高度の文明をもって栄えていたマヤ帝国、インカ帝国、等々は、スペインをはじめ西ヨーロッパ「先進」諸国の侵略によって、その土着民族はすべて虐殺され、金銀財宝はもちろんのこと、その他の文化財もことごとく強奪され、破壊され、ついにこの地球上にその廃墟をとどめるだけのものとなったのである。

(3)　つぎには、原住民を狩りたてて、奴隷として、鉱山や栽培農場で過酷きわまる労働を強制的におこなわせた。その強制的な奴隷労働がいかに残酷なものであったかは、原住民の人口の大量死滅がこれを示している。マルクスは、これについて、『資本論』第一巻第二四章のなかで、つぎのように述べている。

「オランダの植民地経営の歴史は――しかもオランダは十七世紀の典型的な資本主義国だったのだ――「たぐいもまれな、背信と買収と暗殺と卑劣との絵巻を繰り広げている。」オランダがジャワで使う奴隷を手に入れるためにセレベスで用いた人間略奪の制度ほど特徴的なものはない。この目的のために人間泥棒が訓練された。盗賊や通訳や売り手がこの商売での主役で、土着の王侯が主要な売り手であった。盗まれてきた少年は、成長して奴隷船に送られるようになるまでは、セレベスの秘密監獄に隠しておかれた。ある公式の報告書はつぎのように述べている。

「たとえば、このマカッサルという都市には秘密監獄がいっぱいあって、なかでもとりわけ恐ろしい一つの監獄には、むりやりに家庭からもぎとられて鎖につながれ、貪欲と暴虐との犠牲になった哀れな人々が詰めこまれている。」

マカッサルを自分のものにするために、オランダ人はポルトガルの総督を買収した。一六四一年、総督はオランダ人が市内に入ることを許した。オランダ人はたちまち総督邸に駆けこんでかれを殺し、こうして二一、八七五ポンドの買収費の支払を「禁欲」した。かれらが踏みこんだところには、すぐに荒廃と人口減少とが起きた。ジャワの一州バニュワンギは、一七五〇年には八万以上の住民を数えたが、一八一一年にはたった八千しかなかった。うまい商売とはこのことだ！」（ディーツ版、マルクス＝エンゲルス全集、第二三巻、七七九―七八〇ページ、訳九八一ページ、M・E・L研究所版第一巻、七九一―七九二ページ、長谷部訳一

一四四―一一四五ページ)。

(4) 西ヨーロッパの「先進」諸国の商人資本がおこなう外国貿易についていえば、それは、右に述べた直接の略奪と奴隷労働とに結びついた植民地生産物、たとえば香料、茶、等々を主としてとりあつかう仲継貿易であったのである。

以上みてきたものが、西ヨーロッパの商業国民として「先進的な」諸国、とくにスペイン、オランダがおこなった植民地制度の基調をなすものであるが、その他の「先進」諸国、たとえば、ポルトガル、フランス、イギリスにしても、おくれた植民地諸国にたいする関係は、それらの地域の富と人間とを直接・間接に略奪することを基本とするもので、まったく同じ性質のものであることは、『資本論』のなかに述べられているつぎの歴史的事実によっても、疑う余地はない。

「原住民の取り扱いがもっとも狂暴であったのは、もちろん、西インドのように輸出貿易だけを使命とした栽培植民地であり、メキシコや東インドのように豊かな富と稠密な人口をもちながら強盗殺人の手に任されていた国々であった。とはいえ、本来の植民地でも、本源的蓄積のキリスト教的性格は争われないものがあった。あの謹厳なプロテスタントの先達、ニュー・イングランドの清教徒も、一七〇三年にはかれらの州議会の決議によって、インディアンの頭の皮一枚または捕虜一人につき四〇ポンドの賞金をかけ、一七二〇年には頭の皮一枚に一〇〇ポンドの賞金をかけ、一七四四年、マサチューセッツ・ベーがある一つの種族を叛徒と宣言してからは、つぎのような賞金をかけた。一二歳以上の男の頭の皮には新通貨一〇〇ポンド、男の捕虜には一〇五ポンド、女と子供の捕虜には五〇ポンド！ それから数十年の後に、この植民制度は、その間に叛逆者になった敬虔なピルグリム・ファーザースの子孫に仕返しをした。かれらは、

イギリス人にそそのかされて報酬をもらっていた土人の斧で殺された。イギリス議会は、人狩り犬と頭の皮剝ぎとは「神と自然からわが手に与えられた手段」だと宣言した」(全集第二三巻、七八一ページ、訳九八三ページ、研究所版第一巻、七九二―七九三ページ、訳一一四六―一一四七ページ)。

(5)　直接の虐殺および過酷な奴隷労働による原住民の人口激減は、必然的に植民地における強制労働の維持を困難にするが、これにたいして、あくことを知らない商人資本的打算が見いだした方策は、奴隷そのものの貿易、つまり、アフリカ黒人を狩りたててこれを奴隷にし、船に積み込んで植民地に運んで売り渡すことである。この種の商売にもっとも精を出して巨利をふところにいれていたのは、はじめはオランダであったが、これはのちにイギリスにとって代わられた。イギリスは、アフリカと自国領アメリカとのあいだだけでなく、アフリカと英領西インド、アフリカとスペイン領アメリカとのあいだでの奴隷貿易の独占権をにぎり、巨額の富をイギリス本国のためにまさに荒稼ぎしていたのである。

以上見てきたように、富の直接の略奪、原住民の直接の掃滅と強制労働による人口削減および奴隷狩り、奴隷貿易、奴隷労働と結びついた植民制度と植民地貿易――これらが、当時の西ヨーロッパの「先進的」諸国によってつくりだされた、これら「先進的」諸国とその他のおくれた民族社会の地域とのあいだに展開された世界経済の実体である。

こうした歴史的事実を確認することによって、われわれはここからまず、つぎのようなきわめて重要な意味をもつ帰結を導きだしてくることができるのであって、それは、世界経済の成立期から現在にいたるまでの実に五世紀ものあいだ世界経済のあり方をつらぬいている基本的特質ともいうべきものである。そして、この特質をつねに念頭においていないならば、世界経済についての、とくにその動向についての正

しい理解はとうてい望みえないものとなると言っても、けっして言い過ぎではないのである。

一、世界経済という、広範で複雑な関係をつくりだしたのは、実に、資本であり、できるだけ大きな価値増殖を根本動機ともしそれ自身の生命ともする資本のあくなき利潤追求欲である。資本の支配する「先進的」諸国がおくれた諸国とのあいだに結びつきをつくりだし、これを確保することにけんめいの努力をはらうのは、これらの「後進」諸国から可能なかぎり巨額の富を略奪するためであって、その略奪の形態が、直接の強奪と奴隷狩りといった残忍きわまるものであろうと、あるいは、「平和的な」商品取引・貿易または資金融通といった「文化的」「文明的」なものであろうと、その本質はまったく同じもの、つまり一方的強奪にほかならないのである。

二、このように、一方の側に資本の支配する「強奪者」＝「先進」諸国があり、これに対応して他方の側におくれた「被強奪者」＝「後進」諸国があるということ、つまり、両者のあいだにおける支配＝収奪と被支配＝被収奪の関係の存在こそが、世界経済なるものの本質を規定するものである。右の関係が存在しなければ、世界経済なるものは存立しないということさえできる。いいかえれば、主導的な「先進」諸国のこれら「後進」諸国にたいする働きかけかた、つまり収奪様式こそが、世界経済のあり方を決定するのである。そして、このことは、資本の支配する「先進」諸国の世界的優位の関係がつづくかぎり、世界経済を特徴づけるものであることに変わりはないと考えなければならない。

三、したがって、世界史の発展のなかでのそれぞれの各段階における世界経済のあり方、したがってまたその変化＝発展を基本的に規定するものは、なによりもまず、資本の支配する「先進」諸国の内部における経済的諸関係の変化＝発展であり、これと緊密に結びついている「先進」諸国相互間の力関係の変

化＝発展にほかならない、ということができる。要するに、世界経済のあり方、そしてその動向を決定する最大の主因は、これら「先進」諸国内部における資本の支配のあり方、その変化＝発展のうちに求められなければならない。

右のような考え方に立つならば、われわれの世界経済にかんする論究が、これら「先進」諸国内部における経済関係の変化＝発展がどのように展開され、それに応じて世界経済のあり方がどのように変化＝発展するかをとらえることに基調がおかれなければならないことは、当然のことであろう。そしてまた、このような基調のとらえ方が当面妥当なものであるということは、さきに簡単にみた世界経済の成立の時期につづいて、それのつぎの時期への変化＝発展を考察するさいに、ただちに裏付けられるのである。そこで、われわれは、この点を、具体的に跡づけてみることにしよう。

まず、さきに見たような、直接の略奪を主な内容とする世界経済のあり方がとうてい永続しうるものでないことは、明らかである。当時の植民制度も植民地貿易も、すべて商業を主とするものであったが、これは、「先進」諸国内部における商業資本の優勢な支配を反映したものであったといえる。

だが、右のような直接・間接の略奪によって獲得された巨額の財貨は、その本国に流れこんで資本となり、これまで生産の発展を阻止してきた封建的束縛をうちやぶるうえで、大きな力を発揮することになった。旧来のギルド工業に代わって進んだ資本主義的生産方法としてあらわれたマニュファクチュアも、その狭い技術的基盤のため、拡大しつつある新しい市場に対応して生産を拡大することができなくなり、ここに蒸気と機械があらわれて、工業生産を全面的に変革し、きわめて高い生産力をもつ近代的大工業が確立されることになった。これは、これまで経済を支配してきた商人にたいして生産を担当する産業資本家

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com